

論文の内容の要旨

論文題目 ネップ期ソ連における集団主義と性
 ―アレクサンドラ・コロンタイを中心に―

氏 名 北井 聡子

本研究の目的は、アレクサンドラ・コロンタイ（1873-1952）の思想を中心とした、初期ボリシェヴィズムにおける〈集団主義と性〉の問題を明らかにすることにある。共産主義国家とは労働者の共和国であり、そして労働者とは、働ける成人男性が基準となっていることを考えた時、ボリシェヴィキが目指したユートピアが、ミソジニックな傾向を肯定していくことは当然の成り行きであった。勿論、ボリシェヴィキは男女平等を理念として掲げ、女の解放を歓迎していたが、それは「女を男にする」ということ以外の何物でもなかった。E・ボーレンシュテインは、著書『女なしの男たち』において、1920年代のソ連文学には、「男だけの共同体」を創りだそうとする強いパトスが反映されていることを指摘している¹。とはいえ彼の議論でより興味深いのは、「女の不在と排斥」ではなく、幾ら熱心に女を駆逐しようとしても、男たちの同志的絆を媒介する為に、常に〈女〉が召喚されてしまう事態が描かれている点にある。それは亡霊のような身体なき女や機械、あるいは死んだ女の場合もあるが、女は抽象的な概念に矮小化されながらも完全に駆逐されることはないのである。さて本研究で取り組むことになるのは、この男たちによる「女の排除と包摂」のプロセスと、表裏一体の関係にある、女を男たちの集団の一員にする為のコロンタイの闘いである。大半のボリシェヴィキにおいては、家事労働・子育ての共産化を通じて核家族が解体されれば女は自動的に労働者（男）になる、という認識が支配的であった。しかし近代の核家族を維持する家父長構造とは、外的な要因（経済・社会制度）

¹ Eliot Borenstein. *Men without Women: Masculinity and revolution in Russian Fiction, 1917-1929* (Durham: Duke University Press, 2000)

のみならず、言語や精神構造等、人間内部に組み込まれたものであって、また性愛行動の中でパフォーマティヴに日々再生産されていくものなのである。コロンタイは、恐らくポリシェヴィキにおいてただ1人、家父長制の内的な構造そのものの解体を模索した人物だといえる。現在に至るまで、彼女は「水一杯論」というフリーセックス運動を推進したと誤解されているが、彼女が示した解放の手つきは、そんなものを凌駕する別次元のラディカルさを有している。即ち、彼女は家父長制を維持する原理や言語構造を揺るがすことで、人間精神の脱構築に挑むことになるのである。またコロンタイの思想においてもう一つ特筆すべきは、身体構造の変化までを射程に入れた「女の男化」を徹底的に追求したことにある。とはいえ、彼女も男／女の二分法自体を疑問に付さなかった為、宿命的なジレンマを抱えることになる。つまり、誰かが「女から男になる」時、別の誰か（多くの場合は、イデオロギー的に未熟な者）を「新たな女にしよう」ことになる。

本研究は全部で4章構成となっており、主にコロンタイの著作の分析を行うが、とはいえ彼女の生涯を通史として扱うものではない。第一章の前半を除き、中心となるのは1921-1927年のネップ期に書かれた性愛や家族に関する著作である。1921年とは、ネップの開始という意味で、政権にとっての決断の年であると共に、その翌年、コロンタイの個人的な人生においても夫ドイベンコとの離婚を経験した転換点であった。この時期を境として彼女の思想に変化が現れ、有名な一連の恋愛小説や性愛に関する論文も1922-23年に書かれることになっている。

第一章「父のいないユートピア」では、コロンタイが描いた集団主義世界とは、そもそもどのようなものだったかを検討する。前半では十月革命以前の論文を当時交流のあったA・ボグダーノフの思想や19世紀末のロシアの新しい宗教哲学と比較し読み解いていく。この考察を通じて、彼女の集団世界のイメージや核家族を消滅させるというパトスが、ソロヴィヨフの「全一」哲学を継承するものであることが明らかになる。またレーニンとコロンタイの間にある根本的な思想の相違についても扱う。即ち、少数のエリートが大衆を牽引することで共産主義の達成を目指していたレーニンに対し、コロンタイにおいては、革命意識は大衆の内部から生まれるもので、やがてこの意識は、全ての人間を統合することになる。さらにこの全一状態は「神のような存在」とも表現されるのだが、これは東方キリスト教の神学概念である「神化」のプロセスを想起させるものとなっている。後半では、1921年の第十回党大会における、レーニンとコロンタイとの激しい政治闘争を見ていく。両者の思想の相違はここで大きな論争に発展し、結果コロンタイは大敗北を喫することになる。以後、彼女は自身の主張をフィクションの世界で展開することになるのだが、その一つが中編小説『偉大なる恋』（1923）である。ここで注目したいのは、レーニンが党大会中にコロンタイ達を「病」のレトリックでもって執拗に批判していたことだ。これに対し小説では、レーニンがモデルと思われるセーニャが最後に「病」であることが判明する。つまりこれは父殺しの物語であり、コロンタイの目指すユートピアは、

父なき兄弟たちの水平的な世界であったのだ。

第二章では、コロンタイの小説集『働き蜂の恋』（1923）の3作品（『姉妹』『ワシリーサ・マルイギナ』『三代の恋』）を「女同士の絆」に注目して分析する。即ち、この3作品では、女同士の絆を守ったヒロインには悲劇が待ち受ける一方で、断ち切った者は、ジェンダー／セックスを女から男へと「進化」させ、男たちの集団世界へと参入することが可能になっていることが指摘されるのだ。後半では『三代の恋』のジェーニャによる乱交的な性行動の意味を、J・バトラーによるアンティゴネー神話の再解釈を援用し解説する。アンティゴネーとは、国家に禁じられた兄の弔いを遂行した為に命を落とした女であり、これまで家族を守る英雄として解釈されてきた。しかしバトラーはアンティゴネーの埋葬行為とその権利の主張は、兄への近親姦的欲望の遂行であり、このことにより彼女は親族体系を乱す表象となっていると主張する。つまり近代の強制的異性愛に基づく家父長的家族が、近親姦タブーを起点として構築されたシステムであることを考えた時、アンティゴネーの行為によって〈父-母-子〉というエディプス的家族は攪乱され、オルタナティブな親密な人間関係が発生する可能性を生み出しているという。これを踏まえた上で、ジェーニャが自分の母親の新しい夫と関係を結び、またその権利を主張したことの意味は、家父長的家族を内部から瓦解させるラディカルな行為であったといえるのだ。

第三章「エロスの革命」の前半では、コロンタイの性愛論の集大成である「翼の生えたエロスに道を！」（1923）の内容を明らかにする。この論文を解説する鍵となるのは、タイトルの「翼の生えたエロス」である。ここでは、これがプラトンの概念、つまりイデア界と現実界を媒介するエロスが念頭に置かれていることを指摘した上で、さらにプラトンのエロス論をロシアに移植したソロヴィヨフの「愛の意味」との比較を行っていく。この考察を通じ彼女の議論が、ブルジョワ体制のもとでは、家父長的家族をつくり出す力であったエロスを、集団世界全体をつなぐエネルギーへと変換することを求めた内容であったことが明らかとなる。後半では、彼女の性愛論に対して起こったリアクションをみていく。若者から絶大な人気があったコロンタイの「翼の生えたエロスに道を！」は熱狂的に読まれることになるのだが、他方で、彼女の記述は非常に抽象的であり、殆どの場合、正しく理解されず、アナーキーな性愛の称揚と誤解され、時には激しい批判にもさらされている。ここでは数ある批判の中で最も厳しい議論を展開した児童学者アーロン・ザルキンと、さらにザルキンとコロンタイの両方を批判したと思われるアンドレイ・プラトーノフの短編小説「アンチセクスス」（1926）を取りあげたい。

第四章「父性の復権」では、1920年代後半における女性や家族に関するラディカルな考えが保

守化していく様を描き出す。転換点となるのは、世間を震撼させた集団レイプ事件と、家族法改正の議論が行われた 1926 年である。分析の対象となるのは、F・グラトコフの長篇小説『セメント』(1925)、A・ローム監督、V・シクロフスキー脚本の映画『第三メスチャンスカヤ通り』(1927)、S・トレチャコフ作、F・メイエルホリド演出の戯曲『子どもが欲しい』(1927)である。これらの作品のヒロインたちは、いずれもコロンタイが小説で描いた「新しい女」の遺伝子を受け継ぐものとして登場するのだが、物語が進行するにつれ、その性格を徐々に変質させてゆく。最終的に彼女たちは、子どもを持ちたいという「自然な感情」を持つ母性的女へと変貌し、男たちの集団世界からは排斥されてしまうことになる。また作品の中で、男たちの父性の喪失に対する不安が描かれていることにも着目したい。この男たちの不安が家父長的家族を復権させる一つの要因となり、コロンタイの夢見た父なき水平的な兄弟だけの集団世界は、1人の強大な父を擁立する大家族へと向かっていくこととなる。